

○今日的な課題としての「AI教育」「ICT教育」…

・A I 機器・ICT 機器、タブレットなどを手掛かりにしての、創作、描写の場面が多くなってくると思います。カメラが世の中に出てきた 19 世紀、絵描きは職がなくなると言われました。再現や模倣が絵画の軸だったのでから無理もありません。しかしそこから個々人の美意識、表現という自己の感覚や感性が重視されて、美術の世界は広く、自由に展開していきます。

私たちがまた、科学の力を受け止め、個々の表現の糧になるような視点を持ち続けたいものです。今までの授業形態にあてはまらない授業実践や創作も出てくるでしょう。小学校では主流になっている「造形遊び」も無目的に素材を消費するのではなく、モノづくりや手仕事としての要素を抜き出しての有効利用も考えたいと思います。環境や生活を反映した子どもたちのリアルな姿を拾い上げて、メモや日記、漫画など多様なアプローチを試みたいと思います。

・表現の手掛かりとしてのアプローチにデジタル機器の利用がされるでしょうが、生成A I といったデータや条件を読み込ませると作品化されるといったものも、すでに美術の世界では出てきています。学校によってはそのような取り組みも進んでいるかもしれません。子どもたちの興味や関心は大きいかもしれませんが、果たしてそれが個々の表現であるのか、疑問が残ります。大学のレポートでもA I 作成のモノは受け付けられないといわれていますが、急速に進化するA I 教育・ICT 教育に私たちがついていけるのか、心配になります。個人の表現とはという命題は検討されて行くと思います。

作文や文学の世界ではよりリアルに対応を迫られていると思います。図工美術は作品づくりのプロセスがあります。その作品を自らの手で作り出したのか、どこまで手助けを得たのか、まだ見分けられるように思いますが、この先どこまで進化するのか。教育界でも手も使わず制作が可能な社会が来てしまう恐ろしさも感じています。

・図工美術教育はデジタルそしてA I とどのように付き合っていくのか、実践的な検討がこれからの課題です。デジタル、A I の学校導入に応じて、その使い方のレクチャーや道具の理解などなど教員の研修の多くに時間が割かれているようです。目の前の子どもたちの変化や成長を見ることよりも機器の技術的な方法論にウエイトが置かれ、子どもたちが置き去りにされているのではないかと心配します。子どもたち一人一人の違いやそれぞれの個性に注目し、多様な価値や感じ方を大切に育てるのは機械ではありません。表現教育に手軽さや合理化はなじみません。時間のかかる仕事なのです。特に年少期の子どもたちには肌で触れ、体感していく実感を大切に成長してほしいものです。

○図工・美術教育に関わる研究を進めよう

子どもたちの図工・美術教育に関わる方たちにはぜひ、子どもたちの作品を多くの人たち（特に保護者、地域社会）に見てもらう機会を作ってください。自分だけの視点で子どもたちの絵を判断することは、指導者の感性、好みを軸にしてしまっているという視点の矮小化とその危険性を自覚してほしいのです。他の人の視点、観点で子どもたちの創作を見合ってください。

保育士、教員や保護者、地域、子どもの表現に関わる教員 OBOG、美術家などに広く鑑賞の機会を設けて、じっくりと個々の作品と向き合ってください。学校教育はもちろん、子どもの絵を見合う地域に根ざした定期的な美術サークルの存在はとても貴重だと思います。



新しい絵の会の研究テーマ「どの子にも表現する力と生きるよろこびを」に込められた願い

・「どの子にも」…図工美術教育は上手に描けることだけが目的ではありません。たとえ稚拙でも、ハンデキャップがあっても、すべての子どもたちが自らの思いを色と形の表現に結び付ける機会、場面を支援、提供したいのです。一方で評価評定が露骨に出される中学校や高校では自分の成績を見て、創作への興味や、やる気を失ったり、適性ではないと色と形で表現することをあきらめてしまうことも多いようです。成人した彼等が気楽に楽しむということではなく、一部選ばれた人のためだけになっていないでしょうか。学習の評定・観点が卒業後の表現の機会を奪っているともいえるのです。中学高校の評定評価の在り方が問われています。

・「表現する力」…図工美術表現はそれぞれの思いを色と形の形象として表すことです。その手立てや手順、形になるまでの支援を通して子どもたちが主体的に描き出せることを願っています。そのためにはまず、機会と適切な用具を用意することです。立派なスケッチブックや絵の具箱が必要なわけではありません。時々思いをスケッチする紙、気楽に使える鉛筆やボールペン、失敗しても間違えても気にせず描き続けられるような環境が大切です。色に興味が出てきたら、色数の多い色鉛筆（水性が濃く描けて使いやすい）、クレヨンなどをそろえてあげましょう。水彩絵の具はかなり難しい仕様があります。与えておけば描けるということではありません。丁寧に使い方を教えてほしいものです。

モノを描くということは模倣するテクニックを学ぶことが目的ではありません。対象から受けた印象を大切に、自分の体験や思いを色と形に置き換えるなかで試行錯誤しながら、自らの体験や想いをより深く認識し、広げ、自分事化する、自認するのです。それが表現をするということなのです。

正確に描くことが表現力を高める唯一の手段ということではないのです。カメラの発明以降、個々の表現への広がり新しい美術の窓を開きました。現在はタブレットで写して、描く手掛かりにしている実践が増えてくると思います。それは今までの美術教育の形を変えていくかもしれません。難しい問題ですが、一人一人の感性をどのように表現に結び付けるか時間をかけて考えていく課題だと思います。

・「生きるよろこびを」…創造すること、共感すること。コミュニケーションのツールとしての表現を享受することで、生きる力につなげることができればと思います。「生きるよろこび」につなげるのは自らが表現することがまずは大切です。人との比較ではなく自らの思いの表出としての色、形を楽しめたらと思います。その描かれたものを公開しましょう。他人に見られることはとてもデリケートで不安なものです。下手とか似ていないだとか言われまいだろうか、鑑賞する側にもどのように絵を理解する姿勢があるかが分からないのですから。技術力を見る人、有名絵画と比較する人…様々です。これは子どもの絵を見るときにも同様で、上手下手という見方で子どもたちの絵を見、比較していき、作品を選別の一環として見てしまうこともあります。これでは個々の作品から発信している思いを読み取ることができません。作品は個々の表現です。他の作品との比較ではありません。描かれた作品一つ一つから子どもたちの思いを聞き取り、読み取りましょう。それが絵画鑑賞ということなのです。大人の絵もそのような視点で鑑賞できると恐れることなく描けるのですが…。比較ではなく作品そのものを鑑賞することが共感を呼び、次の制作へと続くのです。そして、自らの表現とともに子ども同士が互いの表現を、そして優れた作品を五感を働かせて享受し、共感する機会と力の獲得が、表現力につながるだけでなく、生きるよろこびにつながる重要な活動だと思っています。

・新しい絵の会の「新しさ」…新しい絵の会の「新しさ」は形式に流されず、目の前の子どもたちの実践作品をもとに研究を進める姿勢、すなわち今の社会を反映しながらの試行錯誤が研究の柱となっているということです。

その新しい絵の会は 65 回目の全国大会を迎えることになりました。その間、様々な実践が試みられ、検証され、子どもたちの成長や感性に即した指導や道具立ても研究されました。○○方式などというやり方が広まったりもしますが、目の前の子どもたちの特性や様子を理解したうえで指導者が考え付いたものなのですから、すべての子どもたちに応用ができるとは限りません。やはり目の前にいる子どもたちにはその時々を熟知している担当の先生の創意が必要なのだと思います。何を描くにも同じ大きさの白い紙を与えているとか、いつも 12 色の色鉛筆で描くとか… これでは描く刺激にはなりません。モノを描く前に、どのように、どこを、どんなふうにか…とか対象を描くイメージを膨らませたいものです。その描く対象に応じて紙の大きさや色が変わるとか、もう少し多めの色鉛筆を与えてみるとか、水彩絵の具にしてみるとか。その準備や用意には面倒なこともありますし、道具立ても大変で、お金もかかるかもしれません。しかし、個々の表現を扱う教科です。大切にしたいものです。

今、目の前にいる子どもたちの感性や感情、生きる環境は常に新しいものです。どこかに美術教育のモデルがあって、その作品や方法に近づけることではないのです。絵の会の「新しさ」とは今を生きる子どもたちからの発信なのです。

(みしままさと)



カット（作業所）